Ⅲ 遺　物

出土した遺物には、土器・土製品、瓦、石製品、鉄製品、木製品がある。大半が土器で瓦がそれにつぎ、他はごく僅かである。以下、遺物の種類別に記述する。

1　土器・土製品・その他（図版18・19,第９～12図）

土器は、調査区全域から出土したが、その量は調査面積に比して少ない。土器の種類には、大部分を占める土師器、須恵器のほかに、黒色土器、瓦器、施釉陶器が少量ある。土器の時期は古墳時代から中世におよぶが、その大半は、調査区西半部の整地土、およびその下層の遺構から出土した飛鳥時代から藤原宮期直前までの土器である。ほかに、藤原宮期以降の溝や土坑から出土した土器、地山である暗褐色粘質土出土の古式土師器（第12図１・２）などがあるが、今回検出した藤原宮期の遺構にともなう土器はほとんどなく、それ以外の同期の土器もわずかである。土製品等には、墨書土器、硯、鍛冶関係遺物（坩堝・鞴羽口）、埴輪などがある。以下、藤原宮期以前の土器について遺構別に記述し、整地土出土土器、平安時代～中世の遺構にともなう土器、土製品その他におよぶことにする。なお、土器の時期区分・器種名・調整手法等については『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ・『平城宮発掘調査報告』Ⅶに準拠し、一部新たに設定した。

SK4901出土土器（第９図　１～12）　器種には土師器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｃ・ⅢＡ・鉢・高杯・甕Ａ・甕Ｂ、須恵器杯Ｇ・杯ＡⅣ・鉢・甕がある。飛鳥地域土器編年の第Ⅲ段階（飛鳥Ⅲ段階、以下同様）から飛鳥Ⅳ段階の古い頃に対比される。

土師器　杯ＡⅠ（４）は底部外面を篦削りし、口縁部に比較的密な篦磨きを施す b_1 手法。内面底に螺旋暗文、口縁部に二段放射暗文。口径18.1cm、器高5.5cm。杯ＣにはＣⅠ（３）とＣⅡ（１・２）とがある。１・３は底部をナデ調整、２は篦削りであるが、いずれも口縁部の篦磨きを省略し、内面底に螺旋暗文がある。１は口径11.6cm、器高3.3cm。３は口径16.4cm、器高4.8cm。ⅢＡ（５）は口縁端部の上面に面があり内側に肥厚する。a_0 手法で口径20.6cm、器高2.6cm。甕Ａ（12）の口縁端部は丸く、体部外面下半篦削り、内面はナデ。砂粒を多く含む。口径20.5cm、器高17.0cm。

須恵器　杯Ｇは宝珠形つまみの蓋がかぶる小型の杯で、蓋（６～８）のかえりは口縁部より内側にある。口径[1]8.1～9.0cm。７は硯に転用している。杯Ｇ身には口縁部が直線的な10と丸みのある９とがあり、いずれも底部篦切りのまま。口径9.2～9.9cm。10は器高3.9cm。鉢（11）は底部をロクロ削りで仕上げ、法量は土師器杯ＡⅠとほぼ等しい。

SD4905出土土器（第９図　13～17）　SD4955から西へ分岐する素掘溝でSD4955より新しい。土師器杯Ｃ・杯Ｇ・杯Ｈ・ⅢＡ・鉢Ａ・高杯・薬壺・甕Ａ・甕Ｂ・甑、須恵器杯Ｇ・杯Ｈ・平瓶・瑤・壺・甕など器種は豊富であるが量は少ない。飛鳥Ⅱ段階に対比される。

土師器　杯ＣⅠ（14）は口径16.8cm、器高5.2cmで a_1 手法。底部内面に#状の針描き刻文がある。ⅢＡ（15）は外面篦削りののち底部まで篦磨きする b_3 手法。口縁端部は杯Ｃの

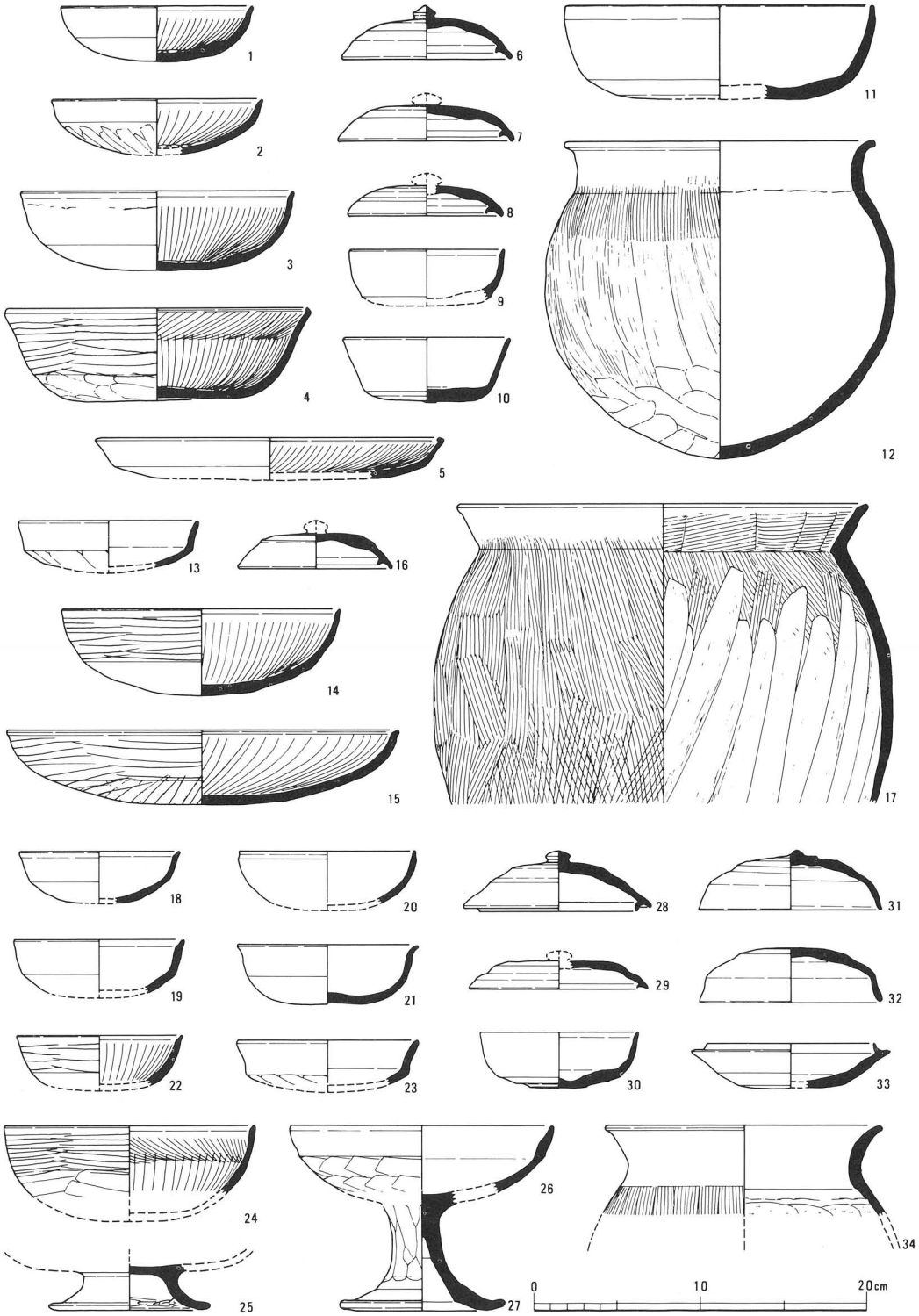
それに似る。口径23.6cm、器高4.5cm。杯HⅢ(13)は口縁部との境に稜をもつ小型の杯でb_0手法。口径10.7cm。甕A(17)は鋭く外反する短い口縁部で、端部には内傾する面をもつ。体部内面は刷毛目ののち上方への篦削り。

須恵器　杯G蓋（16）は口径8.2cmでかえりは小さく、つまみを欠く。図示していないが、須恵器には瓿や小壺などの小型の壺類に漆を入れた痕跡のあるものがある。

SD4955出土土器（第9図 18～34）　整地土下層を北流する素掘溝で、埋土の灰色砂層から飛鳥Ⅰ～Ⅱ段階に対比される比較的多くの土器が出土した。器種には、土師器杯A・杯C・杯G・杯H・高杯・鉢・壺・甕・甑・羽釜・竈、須恵器杯G・杯H・椀・高杯・鉢・平瓶・瓿・壺・提瓶・横瓶・甕がある。その組成は、土師器では杯C・杯G・杯Hが個体数の半分以上を占めて主体をなし、高杯・甕がそれにつぎ、ほかはごく僅かである。須恵器でも個体数の約半分を小型の杯類である杯G・杯Hが占めている。杯類の内容は、土師器と須恵器とは2：1の比率となっており、また、土師器杯C・G・Hはそれぞれ調整手法や胎土などを異にする別器種であるが、法量の上では互いに類似し、Ⅰ～Ⅲの法量による分化がみられる。杯類にみるこの時期の変遷は、須恵器杯類の矮小化と杯Gの増加の傾向、土師器ではa手法の杯Cの増加と磨きの省略の方向にすすんでおり、その点で、SD4955と後述のSD4956出土土器は、飛鳥Ⅰ段階の川原寺下層SD002出土土器[2]と飛鳥Ⅱ段階の標式資料である坂田寺SG100出土土器[3]との中間に位置づけられる。

土師器　杯CⅠ（24）はb_1手法で2段放射暗文をもつ。口径15cm。ほかに同手法で口径18cmのものがある。杯CⅡは口径13.2～13.8cm、器高4.3～4.5cmでb_1手法。口縁部近くまで篦削りし、磨きを省略したものがある。杯CⅢは口径10.0～10.3cm、器高3.5cm前後でa_1手法。22の磨きは粗い。杯Gは『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅰの小墾田宮推定地での土師器杯a類と同じ系譜にある杯で、口縁部を横ナデ調整するほかは不調整、暗文・篦磨きは施さない。口縁端部の形状・胎土・色調の違いによって3種に細別できる。杯Ga類（21）は端部を小さく外反させた直立気味の口縁で、金雲母を含む細かい砂質土で茶褐色を呈する。杯Gb類（18・19）は杯Cに似た比較的精良な赤褐色の胎土で、口縁端部も杯Cのそれに似て小さな面を内側につくる。杯Gc類(20)は口縁端部外側に面をつくり内湾する。淡褐色で砂を含む。18は最も小型で口径9.6cm、器高3.1cm。21は口径10.8cm、器高3.6cmで、杯HⅢ（23）と同法量である。高杯には胎土・調整手法の上で、それぞれ杯C・G・Hに対応する器種がある。高杯H（26・27）は杯Hに対応し、中実に作った脚柱の外面を縦方向に削り、内面は円錐形に篦でえぐる。脚端部は横ナデで丸く仕上げる。25は杯Cあるいは杯Aにつく脚台で、杯部内面に細かい螺旋暗文がある。脚内面にも螺旋暗文を施す精良な製品。脚径9.8cm。甕には口径が23cm前後、16cm前後、10cm前後の大中小3種がある。34は中型の甕で口縁端部を丸く仕上げ、体部内面を篦削りする。大型のものに口縁端部を上方に突出させ、外側に面をもつものがある。

須恵器　杯Hは蓋の口径が10.6～10.8cmで、頂部を篦削りするもの（32）と篦切りののち



第９図　出土土器実測図 Ⅰ

にナデ調整するもの（31）とがある。杯H身は口径11cm前後でかえりは短く、底部を篦切りののちナデ調整するもの（33）が主体を占める。杯Gは身口径9.4～10.5cmのものがあり、10cm前後が主体。調整では底部を篦切りののちナデのもの（30）が多く、ロクロ削りのものもある。杯G蓋は口径9.3～10.5cmで、最も大きい28はかえりの端部が口縁よりも突出し、乳頭状の名残りを留める小さな宝珠形のつまみがつく。

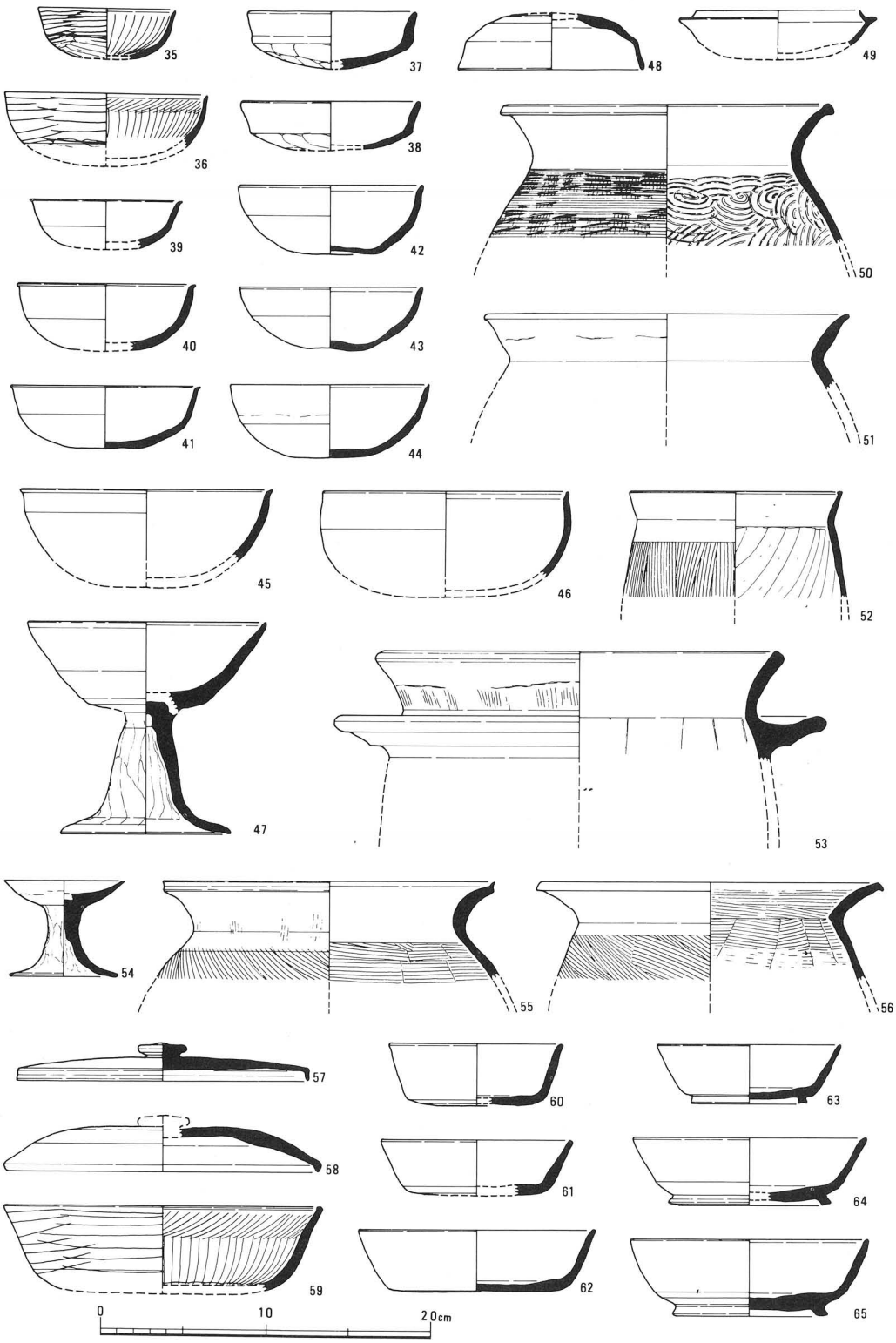
SD4956出土土器（第10図 35～53）　SD4955の西を北流する素掘溝で、炭混じり暗褐色土の上層と灰色砂の下層とに分れ、土器はおもに上層から出土した。下層の土器も上層の土器と差異がなく、また、北区に点在する溝状の不整形土坑もこの溝の名残りであり、互いに接合する個体もあることから一括して扱う。器種には土師器杯C・杯G・杯H・鉢・高杯・甑・羽釜・甕A・甕B、須恵器杯G・杯H・高杯・平瓶・甕などがある。SD4955よりもやや古い様相をもち、飛鳥Ⅰ段階の新しい頃に位置づけられる。

土師器　杯Cは法量によりⅠ～Ⅲに分れる。いずれも b_1 手法で磨きを密に施す。CⅠ・CⅡ（36）には二段放射暗文があり、36の口径は12.4cm。杯CⅢ（35）は口径8.5cm、器高3.1cm。杯G（39～46）はSD4955出土品と同じく、a類（39～42）、b類（43～46）、c類の3種に分れる。また、杯Gには細別をこえて、杯GⅠ（口径15～18cm，45・46）、GⅡ（11～12cm，40～44）、GⅢ（9.0～9.3cm，39）の法量分化がある。杯GⅡには灯火具に使用されたものがある。杯Hにも法量による分化があり、37・38は口径10.2～10.8cm、器高3cm前後でHⅢにあたる。高杯G（47）は杯Gに対応する高杯で脚を横ナデ調整でつくり端部を小さくつまみ出す。これは、杯Cに対応する高杯には脚内面にしぼり目と指おさえがみられ、外面が平滑なのと異なる特徴である。杯部は平らな底部からまっすぐに開き、内外面とも横ナデである。口径14.5cm、脚径10.3cm、器高12.8cm。甕Aには口径が24cm前後、20cm前後、13cm前後のものがある。小型の52は、端部上面に面をとる直線的な口縁で体部は外面に細かい刷毛目、内面は上方に篦削りする。大型の甕には口縁端部を丸くおさめるもの（51）のほかに外側に面をつくるものがある。羽釜（53）は縦方向の刷毛目ののち大きな鍔をつける。暗褐色で雲母を多量に含む。口径22cm。

須恵器　土師器に比べて量、器種ともに少ない。杯Hは口径11cmあまりで浅く、蓋（48）の頂部はロクロ削り。身（49）には低いかえりがつき、底部を篦切りののちナデ調整したものが多い。杯Gは口径11cmたらずで、底部は篦切りのままである。甕（50）は土師器甕に似た器形で、口縁端部の形状も異例である。

SD4957出土土器（第10図 54～56）　SD4956を埋めた後に掘られた東西石組溝。器種には土師器杯C・杯G・鉢・小型高杯・壺・甕、須恵器杯H・平瓶・甕などがある。量的には少ないが、SD4955とほぼ同じ内容をもつ。小型高杯（54）は脚径6.7cm、器高5.8cmで、口径9.8cmの小さな杯部は全面ナデ調整。暗文や磨きはない。大型の甕（55・56）には口縁端部に面をつくる多様なものがあり、小型甕の口縁は丸くおさめる。

整地土層出土土器（第10図 57～65）　調査区西半の整地土層から出土した比較的多量の



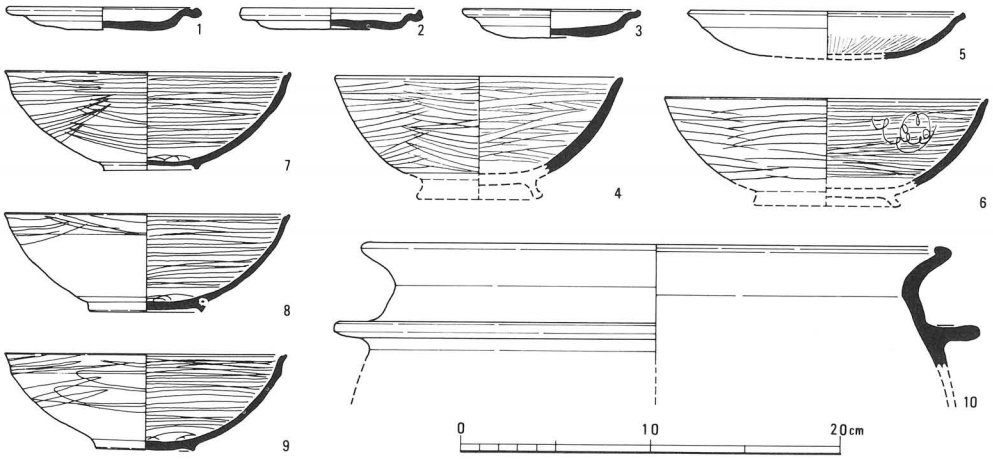
第10図　出土土器実測図 Ⅱ

土師器・須恵器の大半は、下層遺構出土品と同じ内容の土器であり、ほかに、主として整地土上半部から飛鳥Ⅳ～Ⅴ段階の土器が少量出土した。後者は、整地土層を切り込む建物遺構の造営年代の上限を示す重要な資料で、それらには土師器杯ＡⅠ・蓋、須恵器杯Ａ（60～62）・杯Ｂ（63～65）・杯Ｂ蓋（57・58）・長頸壺などがある。土師器杯ＡⅠ（59）は口径18.8cmで口縁端部は内側にわずかに肥厚する。a_1 手法で内面には二段放射暗文、底部に螺旋暗文。飛鳥Ⅳ段階に属す。須恵器杯Ａはいずれも底部をロクロ削りで仕上げるが、60は形態・法量のうえで新しい傾向にあり飛鳥Ⅴ段階に対比される。杯Ｂの高台はやや低いが外方へ踏ん張っており、63は口径11cm、器高3.5cmで、灯火具に使用されている。杯ＢⅠ蓋（57）は杯蓋転用硯である。飛鳥Ⅴ段階に属す。

SD4915出土土器（第11図１～４）　西脇殿SB4920の柱穴の上を北流する素掘溝。埋土の粗砂層から土師器杯Ａ・小皿、黒色土器椀Ｂが出土した。小皿（１～３）は口縁が手かぎ状に屈曲し、口径9.3～9.8cm、器高1.1～1.3cm。黒色土器椀Ｂ（４）は全面漆黒色の黒色土器Ｂ類で、外面に針書きがある。小皿の形状から10世紀末から11世紀初頭に位置づけられる。SD4916・4917、SK4927からも同時期の土師器が出土している。

SD4958出土土器（第11図　５・６）　南区中央の東西素掘溝で、粗砂層から土師器杯Ａ・皿Ａ、黒色土器Ａ類の椀Ｂが出土した。皿Ａ（５）は口径14.4cm、器高3.6cmで、内面に刷毛目が残る。黒色土器椀Ｂ（６）の外面の磨きは粗く、内面には密な磨きの上に螺旋状の花文をつける。口径16.8cm。土師器杯皿にｃ手法がみえないことから、平城京SD650Ｂより新しく、10世紀前半に位置づけられる。土師器杯Ａの底部に文字を針書きした破片（図版19，第12図４）があるが、判読できない。

SK4953出土土器（第11図　７・８）　瓦器椀５点があり４点が完形である。外面の磨きに粗密があるが、口径14.6～15.0cm、器高5.2～5.3cmで、断面三角形の高台がつく。大和型瓦器の川越編年Ⅱ－Ｂの古い段階に対比され[4]、12世紀中頃に位置づけられる。



第11図　出土土器実測図 Ⅲ

SK4938出土土器（第11図 9・10） SK4936の北にある小土坑で、重ねられた2点の瓦器椀と土師器羽釜（10）が出土した。瓦器椀（9）は口径14.3～14.8cm、器高4.9cmで、川越編年のⅡ－Bに対比され12世紀後半。

SK4935・4936出土土器 SK4935・4936は牛の鼻木の出土した土坑で、SK4935からは底の盛り上がった小皿と瀬戸焼のおろし皿片が、SK4936からは薄手で硬質の土師器羽釜が出土し、ともに年代は14世紀後半とみられる。

墨書土器（図版19，第12図3） 須恵器杯Bが1点ある。墨書は底部外面の中央にあり、「衣女」と読める。土器は比較的高い高台が内寄りにつき底部は箆切り。飛鳥Ⅳ段階かⅤ段階に対比される。「衣女」は古代の女性名であろうか。

硯（図版19） 前述した杯蓋転用硯と円面硯がある。円面硯は脚部の破片で、幅2cmの切り込みで多脚をつくる。下底径25.6cm、18脚に復原できる。整地土層出土。

鍛冶関係遺物（図版19，第12図 5・6） 坩堝、鞴羽口、鉱滓が整地土層、SD4955・4956から出土し、その作業台に使用されたと思われる榛原石の板石が伴出している。

坩堝（第12図5・6）は口径13cmほどの椀形で内面は焼けただれて白灰色に変色する。榛原石の板石は周囲を敲いて長方形に整える。全形のわかる例（図版19）では長辺36cm、短辺18cmで、一方の面が火熱を受けて黒変し、そこに赤色の付着物がある。

埴輪 円筒埴輪と不明形象埴輪がある。円筒埴輪には粗い横刷毛目で黒斑のある5世紀中頃のものと、6世紀初頭のものとがある。日高山山上と北方とで出土した埴輪群と時期的には同じであるが、埋没した経緯は異なるものと考えられる。SD4955・4965出土。

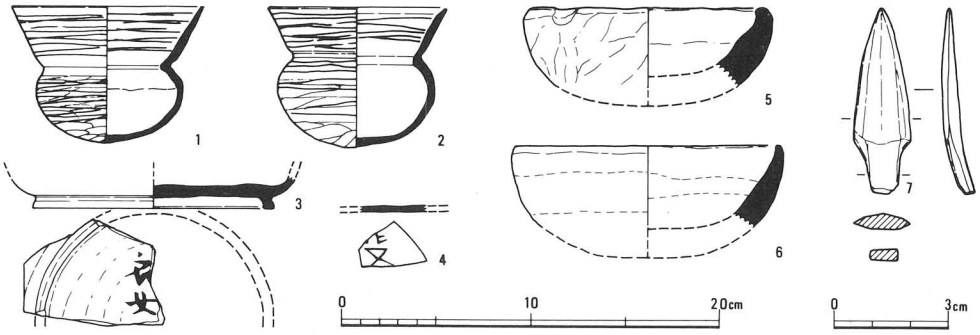
金属製品 SK4926出土の鉄製鉈（図版19，第12図7）がある。全長4.9cm、幅1.5cmである。SK4926からはこれのみが出土し、時期は不明。

1 須恵器杯G蓋、杯H身などかえりのある器種の口径は、それらに組み合う身や蓋のあたる部分での直径で記した。

2 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』10，1980.

3 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』3，1973.『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ，1978.

4 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』1983.



第12図 出土遺物実測図

2　瓦

瓦は溝、土坑、柱抜取り穴などの遺構や整地層のほか、それらを覆う包含層から少量出土し、整理箱で５箱分ある。軒丸瓦と道具瓦の小片が数点あるほかは、丸瓦と平瓦が多数を占める。記述にあたっては、奈良国立文化財研究所が設定した型式番号を用いる。

軒丸瓦　４型式４種、各１点がある。6275Ｉ・6276Ｃ・6279Ａは藤原宮所用の複弁８弁蓮華文軒丸瓦で外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。6275Ｉは中房に１+４+８の蓮子を配し、調査地に隣接する日高山瓦窯の製品である。6276Ｃは中房に１+５+９の蓮子を配す。生産地は特定できないが、乳白色を呈する緻密な胎土の特徴から奈良県五条市周辺で作られたものと推定できる。6279Ａは中房に１＋８の蓮子を配す。日高山瓦窯で生産されたものであるが、胎土に多量の砂粒を含み、瓦当裏面に横方向のナデ調整を施す点から、この瓦窯での最終段階の製品と推定できる。このほかに面違鋸歯文縁をめぐらす複弁８弁蓮華文軒丸瓦があり、川原寺創建時所用の軒丸瓦601Ｃと同笵の可能性が強い。笵がかなり摩耗している点や、胎土の特徴は同じく同笵の和田廃寺出土例に酷似する。

道具瓦　日高山瓦窯産の丸瓦を分割して製作した面戸瓦１点と、おなじく日高山瓦窯産の平瓦を分割して製作した熨斗瓦２点がある。

丸・平瓦　丸・平瓦は小片を除くと全部で313点あり、丸瓦が128点、平瓦が185点ある。丸瓦のうち112点（87.5%）はその製作技法や胎土の特徴から日高山瓦窯産であることが確認でき、のこる16点（12.5%）がそのほかの生産地のものである。おなじく平瓦のうち141点（76.2%）は日高山瓦窯産で、のこりの44点（23.8%）がそのほかの生産地の製品である。日高山瓦窯産の丸・平瓦のなかには焼けひずんだもの、高熱により破片が融着したもの、破面に２次的に火を受けたものなどがあり、大部分が日高山瓦窯の灰原に捨てられたもので、西南坪の整地にともなってこの地に移動したものと推定される。一方、そのほかの生産地の丸・平瓦は、御所市と高取町の境界にある高台・峰寺瓦窯などから藤原京にもたらされたものである。その出土位置を検討すると、正殿SB4900と西脇殿SB4920の柱抜取り穴から大型破片がまとまって出土していることが目につく。点数が少なく断定はできないが、これらの瓦は内郭の建物の棟などに使用されていた可能性も考えられる。なお、このほかに、７世紀前半から後半にかけての丸・平瓦がごく少量ではあるが認められた。

3　柱根・木製品　（図版19, 第13図１～４）

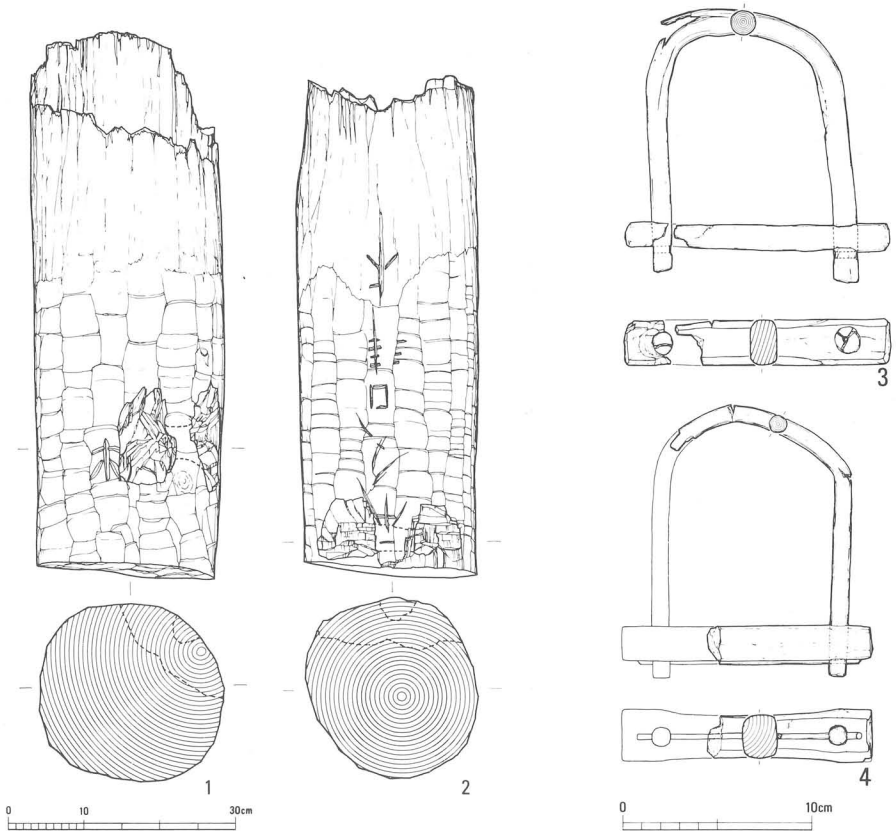
正殿SB4900、および後殿SB4930から柱根が12本出土した。この柱根のうち５本は正殿北面の庇と、後殿広縁の床束である。SB4900・4930身舎の柱根はヒノキ材で直径は23～25㎝であり、藤原宮内の殿舎や、京内官衙と考えられる左京六条三坊の主要な建物の柱の直径が30㎝前後であるのに比較してやや細い。後殿に用いられた柱根には、その基部に文字が刻まれたものがある。１は「木」、２は下端を天として「□本久口□木」である。加工と調整の痕跡からみると、最初に文字が刻まれ、ついで手斧でハツリ調整し、最後に筏穴をあけていることから、この文字は伐採地またはその付近で刻まれたが、木材を搬出す

るときには不用となっていたと推定される。なお木口下端の整形は、1が手斧ハツリであるのに対し、2は鋸で切る。2については筏穴と鋸で切断した木口面との間がきわめて近いことから、建築現場で切りそろえられたものと考えられる。

木製品には鼻木と曲物がある。鼻木とは牛の鼻の孔に通す環状の木で、土坑SK4935から2点、SK4936から1点が、14世紀後半の土器片や牛の骨とともに出土した。SK4935の場合は共伴した牛の歯の数から、2頭の牛が鼻木をつけたまま埋められたことが知られる。鼻木はヒノキの細い枝をU字形に曲げ、これにカシのはめ木をはめ、さらにその両端部をとめ木で固定する組み合せ式のものである。3はさらにU字形に曲げた部材の両端木口に小さな楔を打ち込み、また4は、はめ木の中央部分の幅をやや狭めている。鼻木の寸法は3が内側で長さ10cm、幅8.5cm、U字形の部材の直径は1.3cm、はめ木の長さは復原で14cm、幅2.4cm、厚さ1.4cmである。なお、大阪府大県南遺跡からほぼ同形の鎌倉時代の例が、また、二又の枝を利用した例が草戸千軒町遺跡から出土している[1]。

曲物は、藤原宮期の土坑SK4970の底に側板だけ据えられていたものであるが、遺存状態が悪く取りあげられなかった。長径60cm、短径35cm、高さ約5cmである。

1　柏原市教育委員会『大県・大県南遺跡』柏原市文化財概報1983-Ⅲ，1984.
　　広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡－第11～14次発掘調査概要－』1976.



第13図　出土柱根・木製品実測図